

第36回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。

先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

※生徒の学年は、コンクールが行われた平成22年度当時のものです。

■中学校3年生の部 最優秀賞

しあわせな食事

弟子屈中学校 関 桜子さん



「いただきます」は私たちがごはんを食べる前に、必ず使う言葉だ。この言葉には二つの意味がある。一つは食材に対する感謝の意味だ。卵一つでも鶏がお腹を痛めて産んだ命の魂なのだから、大切にしなければならぬ。それと同時に料理をつくる人にも感謝する。それがもう一つの意味だ。料理をするというのは大変だ。私がとくにそれを感じたのは、初めて母の料理を手伝った時だった。

その時任せられたのは玉ネギの微塵切り。私は初めて握った包丁の感触に、はしゃいだのを覚えている。しかし、本格的に切っていくうちにそれは苦痛の連続に変わっていた。土色の皮はペリペリと切れてしまつて上手くむけないし、白いつるつるした茎の部分を切れば鼻がつーんと痛み、おまけに涙が止まらなかつた。そして時間をかけて、やっと切り終えた。その時の微塵切りの大きさはバラバラでも不恰好だったが、母はそれを「あら上手ね」とほめてくれた。そして母はそれを使ってチャーハンを作った。ケチャップ色のチャーハンの中には、ちゃんと私が刻んだ玉ネギが入っていた。しかし、食卓にそれが並んだとたん、急

に不安になった。味をつけたのは母だったが、私が手を加えたことよつてチャーハンの味がおかしくなつていないか心配になつたのだ。母が父に私がお手伝いしたこと伝えると、父は一口食べたチャーハンをもう一度味を確かめるように口にさせた。そしてほう、とつばやき「おいしいじゃないか」と私に向かつて笑つてくれた。私は普段笑わない父から、そんな言葉が出てくるなんて思つてもみなかった。驚いたが、それ以上にうれしかった。ちゃんと出来ていたかどうか不安な自分、父のその言葉で全部安心に変わつていった。そして、母の料理をまた手伝いたいと思つた。いや、今度は最初から全部自分でつくて、家族みんなに喜んでもらいたいと思つた。それでもやはり、初めての料理は不安と疲れでいっぱいだった。

この本の主人公である倫子も、初めての料理にはとまどいがあったらしい。十五歳…つまり私と同じ歳で上京し、都会の祖母の家に彼女は下宿した。そこで料理上手の祖母に料理を一から教えてもらった。それまで一緒に暮らしていた母と二人でインスタント食品ばかり食べていた。なので味噌汁や醤油を自らの手でつくてしまつて祖母に、とても驚いたらしい。私はそのエピソードから、それだけインスタント食品は、料理の大変さを教えてくれない物だと思つた。

ただ私たち現代人の食事はどうだろう？多くの人は昔の倫子のように、インスタントですませてしまつて料理を

しなくなつてゐる。それは実にさみしい事だ。料理をしないという事は、食べてくれる人のために一生懸命にならないという事だ。本の中で倫子が言つていたものに「インスタントの食品には、感情や思い入れが全く無い」という文があった。私はそれを読んで、これでは楽しい食事が、ただのエネルギー摂取になつてしまつと思つた。それではいけない。食事はたくさんさんの気持ちが入つていなければならぬからだ。それは食べたい気持ち、食べさせたい気持ち、どんな食べものが出てくるのか楽しみでワクワクしている気持ち。これらの気持ちが、しあわせな食事に欠かせない調味料になる。その大切な調味料は愛情こめて、つくられた料理しか入つていない。食べる事を楽しまなければ、その調味料に気がつかない。

だから私は、食べるという事はとても幸せだということ。料理は愛情こめてつくることが、もっと多くの人たちに伝えていきたい。そして「いただきます」をもつと大切にしていきたいと思つた。

(寸評) 自分の初めての料理経験を思い出して、料理を作ることの難しさと、食べてもらうことの喜び、そして何が一番大事なのかを気づかせてくれたこの本との出会いは、大きな糧になったのではないだろうか。これからは沢山の料理を味わうように、多くの本を味わつてほしいと思います。

■高校生の部 最優秀賞

ブラバン

弟子屈高校2年 鈴木まなみさん



この感想文を書いたのは、ちょうど高文連周辺の夏休み後半であり、初め私はこの本で感想文を書くことがどうか迷っていました。吹奏楽部の自分が、こんなリアルな内容の本の感想を、現在の自分と比較しながら書くのはどうなんだろ、下手な自分がそんな偉そうなことを書いても良いのだろうかと思つたからです。そのくらいにこの本には今の自分たちと酷似した内容が多かつたと言えます。

私の卒業した中学校に吹奏楽部はなく、私はバドミントン部に所属してしまつた。そのため、吹奏楽というのは高校に入ってから初めて挑戦したものであり、楽器に触れたのもそのときが初めてでした。中学校の時から楽器を吹き続けている人たちが多く入るこの部に、音もまともに出すことができない素人が入部するというのはとても不安で気まずいものです。中学から吹いている人との差が大きくありますし、そのときの私は、ちよつとした憧れと先輩方からの話で興味をもって入つただけだったので吹奏楽というものがよく分かつていませんでした。楽器を吹くことが難しいの

は知つていたけれど、どんな風に難しいのか、どんなところが難しいのか理解できていませんでした。だから、基本的に個人プレーであるバドミントンをしていた私が、団体で芸術を作り上げる吹奏楽部に入ったのは自分の中で大きな決断だつたと思ひます。

私が始めたのはホルンという楽器でした。この本にも書いてあったとおり、ホルンというのは「音を出す」ということにおいて最も苦労する楽器であり、ギネスブックに載るほど難しいと言われているそうです。そんな大変な楽器だとは知らずに始めた私は、例外なく「音を出す」ことに苦しめられました。とにかく扱つのが難しい楽器で、今も現在進行形で苦労している部分はたくさんあります。出したい音が出せない、周りの音が難なく出している音が出せない、そんなものどかしい気持ちになつたことが一体どれだけあるでしょう。この物語の中で、そんな私が一番共感できたのは、チューバ後にユーフォニウムの唐木君です。何の楽器をかがじつていたわけでもなく、高校から入部した彼。初めてのコンクールで、たつたの一音も出せなかつた彼。楽器も性格も私とは全然違つけれど、一番感情移入してしまつて登場人物でした。彼の一年生の頃の様子を見てみると、昨年の自分を思い出します。基礎的なことも何もできない状態で皆との合奏に混ざり戸惑つていたあの頃は、本当に苦痛でした。なかなか出したい音が出せず、先生の指揮や皆の動きに合わせる

ことができないう日々。覚えてたの指も動かさず、楽譜もどこを進んでいるのかも見失い、指揮者の耳に届かないような弱々しい音しか吹けません。あの頃の自分は、いつも帰りのバスの中で落ち込んでいた気がします。何度「上達の遅い楽器だから」という言葉を聞いても、落ち込みます。にはいられません。唐木君がそのときどんな心情だったのかという詳しい描写はありませんでしたが、私には、あの時期の自分と似たような気持ちだつたのではないかと感じてならないのです。

この本には、そんな唐木君やコントラバスの語り手を始めとした、たくさんの方の吹奏楽部員が登場しています。その数には及びませんが、私たちの部にも様々な楽器を担当する部員がいて、パートや役割ごとにそれぞれ悩み事があると思ひます。皆で全道進出を目指す上で、私は自分の技量をもつと上げていきたいです。昨年は、皆についていくのが精一杯でした。何とか音を出すということだけで頭の中がいっぱいになっていました。だけど、今度はもっと上を目指して自分を成長させたいです。役割的にも、私たちは部活を支えていかなければなりません。ここで皆に迷惑を掛けたくはないです。もっと上手くなりたいと三年生引退間近の今、強く思ひます。自分だけではなく皆で上手くなりたい、そう思つています。そのためには部の雰囲気もとても大切だと言えそうです。誰か一人が欠けても、曲は完成しません。時には衝

突してしまつこともありますが、それも含めて、より良い吹奏楽部を作り上げていきたいです。

大変なこともありませんが、私は吹奏楽を始めることができて良かったと思つています。バドミントンをしていた時はまた別の緊張感がありますが、この緊張感や苦労が良い思い出を作り上げてくれるのではないかと思ひます。この話の登場人物たちは、大人になつても高校時代の吹奏楽部での日々を鮮明に覚えていました。それがとても羨ましいです。私も覚えていきたい、大人になつたときに笑いながら今の思い出を語り合つていきたいと、本を閉じてしみじみ思ひました。

(寸評) 本人のエピソードと本の内容のバランスがよく、読みやすい。挑戦や願望など、高校生らしい想いがよくあらわれていた。背のびしない等身大の姿を感じることができた。学んだこと、学んでいることを通してこれからの生活にどう生かしていくかが書かれていて、深みが増したように感じた。